

Table ronde

教員養成／相互研修の現場から考える
フランス語教師の専門性

Quelle professionnalité pour les enseignants de français ?
Discussion avec différents acteurs de la formation des enseignants

明石伸子 AKASHI Nobuko (フランス語教育国内スタージュ)
今中舞衣子 IMANAKA Maiko (Rencontres Pédagogiques du Kansai)
野澤 督 NOZAWA Atsushi (ペダゴジーを考える会 PEKA)

本論稿は、今年のランコントル関西の全体テーマのひとつ「フランス語教師の専門性とは？」という問いを、フランス語の教員養成や教員どうしの相互研修という観点から考えたテーブル・ロンドの報告である。当日は、日本におけるフランス語教員養成および相互研修の場として大きな役割を担っている 4 つのコミュニティ（フランス語教育国内スタージュ、Rencontres Pédagogiques du Kansai、ペダゴジーを考える会 PEKA、Journée Pédagogique de Dokkyo）から、議論のための話題提供を行った。各活動の歴史的経緯、現在の活動の概要、教員養成・相互研修の場の運営に関わる中で見えてきた「フランス語教師の専門性」に関する各パネリストからの報告を以下に収録する。なお、当日は大学行事の関係で出席がかなわない中、資料提供によるご協力をくださった中村公子先生に厚く御礼を申し上げます。

新たなるフランス語学習指導の起点として
—フランス語国内教育スタージュ (Stage de mars)
AKASHI Nobuko
Université Waseda, mykopie?gmail.com

日本の高等教育におけるフランス語教員に対して、学習指導者としての公的資格は必ずしも求められない。多くの場合、文学あるいは語学、そのほかフランス語圏に関連した専門分野を持つ研究者が、語学教育を担当している。自分自身の学習指導が、現代に生まれ育つ受講者の必要に即しているのか、つねに問いかけ続けることが重要なのは明らかなのだが、実際には「教えることを教わることさえなしに教える」というケースがとても多いことになる。

とはいえ、1963 年から今日に至るまで、わずかな空白期間をのぞいて、フランス語の教員養成の試みは行われてきた。そこにはふたつの歴史がある。その誕生から 2004 年まで文部省（2001 年 1 月 6 日、中央省庁再編にともない、旧科学技術庁とが統合されて文部科学省となる）、フランス大使館、日本フランス語フランス文学会により実施されていた旧スタージュ、そして 2006 年よりフランス大使館、日本フランス語フランス文学会、日本フランス語教育学会によって復活した新スタージュである。こうした経緯により、スタージュという言葉の響きが、各々の経験者の胸のうちで奏でる感慨は、どちらの教員養成に参加したかで変わることであろう。

このたび、「フランス語教師の専門性とは？」というテーマのもとで、新スタージュ、すなわちフランス語国内教育スタージュ（通称 Stage de mars）を取りあげていただいたことについて、心より感謝を申し上げたい。新しい教員養成システムを説明する貴重な機会に恵まれた。

飯田橋のアンスティチュ・フランセ東京にて実施される新スタージュにおいては、日本各地から応募して書類選考を経た 20 名のスタジエールたちが、四日間のインテンシブな研修に取り組む。Rencontres Pédagogique du Kansai（関西フランス語教育研究会）あるいは Journée de Dokkyo（獨協大学フランス語教授法研究会）がワークショップ形式で、主として日本の教育現場でフランス語学習指導が直面する様々な諸問題への解決策を探究するのに対し、新スタージュではヨーロッパ言語共通参照枠（= Cadre européen commun de référence pour les langues : CECR）に依拠したフランス語教授法の基礎が精力的に伝授されている。

具体的に述べると、まず、教員養成に関する専門家がフランスよりメイン講師として招聘される。ここ数年についていえば、FLE（= Français langue étrangère）の教育者としての心構え、教授法の歴史、実生活で触れる文書や文学テキストの活用法などが担当されてきた。さらに、国内で活躍する日仏の講師陣からは、文法説明・発音指導・授業準備等の授業がもたらされている。これらの教授法に関する基礎知識の吸収と並行し、教案の練り上げから実践へと至る模擬授業の演習は、フランス語の教えかたについて振り返るための貴重な経験である。短い研修機関のなかで多大なエネルギーを割くことになるが、それは同時にスタージュの華であるともいえる。また、この研修が終えたあとも、教育関係の活動を継続できるよう、多様な研究会情報について紹介がなされる。なお、スタジエールなかで選抜を通過した希望者に対しては、夏のフランス研修や DUFLE への給費が与えられる。ちなみに、東京で行われる新スタージュそのものへ地方から御参加いただくスタジエールへ対しては、宿泊補助制度も用意されているので、ふるって御利用いただければ幸いである。

フランス語を教えるための専門的な学びのステップがほぼ存在しないに等しい日本の現状において、この研修の価値はとてつもなく大きい。また、新スタージュは、教職課程を経た中等教育における指導者や、フランス語教員をめざす大学院生にも門戸を開いている。まさに、地域や世代や職場を超え、「フランス語を教えること」により結ばれる学習指導者のつどいの場である。その熱さは参加した者たちにしかわからない。だからこそ、フランス語教員であることのすばらしさを再認識するためにも、ぜひ参加を考慮していただければと思う。

教えるということは容易ではない。しかしながら、この難題に立ち向かうための教授法が存在し、なおかつ自分は決して孤独な存在ではないことを実感できれば、日々の指導にも力がみなぎる。日本の未来を背負う受講者たちに、フランス語という情報のアンテナを享受してもらうために、研鑽を積んでいく新しいスタージュがさらに周知されることを望んでやまない。各年度のスタージュについては、各々の主催機関のサイトに情報がアップされるので、ご高覧をいただきたい。

**Rencontres Pédagogiques du Kansai の活動を通して考えた
フランス語教師の専門性
IMANAKA Maiko
Université Osaka-Sangyo, imanaka@las.osaka-sandai.ac.jp**

Rencontres Pédagogiques du Kansai（関西フランス語教育研究会、以下 RPK）は、1987 年にフランス共和国駐日大使館文化部の Jean-Paul Honoré 氏のもと、関西の教育機関に所属している約 20 名のフランス語教員によって活動を開始し、徐々に参加者数を増やしながらか教員による自治的な運営組織として発展してきた。大会およ

び論稿集の出版は教員の無償労働によって運営されており、事務局長、副事務局長（大会運営／論稿集）、会計、会計監査、ビュッフェ、ウェブ、その他役職を参加委員で分担している。現在の収入源は発表者、運営委員を含む全ての参加者からの大会参加費が大半で、それに加え各協力団体より賛助金、各出版社よりスタンド展示参加のための協力金をいただいている。

RPK の年次大会は、Rencontres という名が示すとおり、フランス語教員の「出会い」の場である。そのため、ビュッフェやコンサート等のイベントも RPK の一部である、ということのを特に強調しておきたい。RPK には入会費や年会費がない。つまり毎年の参加費は、研究会に参加するための費用というだけではなく、ビュッフェ代、論稿集代を含むその年度の RPK の活動全般への参加を意味している。講演者や協力団体を含め、全員から同じ額の参加費を受け取っているのはそのためである。そういった意味で、たとえ運営委員として準備に加わっている人でなくとも、その年の RPK に参加した人全員が RPK の運営を支えていると言える。

主たる活動である年次研究会の開催、論稿集の発行に加え、2013 年 10 月より有志による月例会を開催している。月例会では話題提供者を中心に、日々の教育実践について少人数での活発な議論が行われている。年次研究会よりも頻繁に実施されていることから、他の学会、研究会への参加報告等、教育全般についての最新の情報を共有する場ともなっている。今後の月例会については月例会ブログ (<http://rpmensuels.blog.fc2.com/>) を参照してほしい。RPK 全般については下記のサイトからアーカイブ、最新情報にアクセスすることができる。

- ・公式ホームページ (<http://www.rpkansai.com/>)
- ・公式 Facebook ページ (<https://www.facebook.com/RencontresKansai>)

私は 2009 年から RPK の運営に関わってきて、多くのことを学ばせてもらった。初めて事務局長を引き受けたときにはまだ 20 代であったが、関係機関との交渉、運営委員会の調整、スケジュール管理等、若いうちから責任ある仕事を任せてもらったことで文字通り RPK に育ててもらったと感じている。こうした仕事を進めるにあたっては査読、編集、パソコン、デザインなど様々なスキルが必要とされる。全員がボランティアとして関わっているということは誰かに手取り足取り教えてもらうことはできないということで、見よう見まねで少しずつ身につけていくしかない。またフランス語、日本語に関わらず、無駄なくかつ相手に失礼のないメールのやりとりのためには高度な言語技術が必要とされる。これも当初は赤面するような失敗をしながら、相手の寛容さに助けられつつ回数を重ねることで少しずつ学んでいった。多くの人と関係を持つ中で反面教師にも数多く出会い、人に迷惑をかける仕事の仕事について考えるきっかけにもなったと思う。

RPK に関わる中で教員／研究者として最も糧になったと思う点は、毎年の全体テーマの設定や Table Ronde の企画に関わったことである。毎年秋になると運営委員で集まって、昨年アンケートの結果なども参考にしながらいろいろなアイデアを出す。その場で生まれるアイデアは、メンバーがフランス語教員として日々の実践の中で考えていることにつながっていて、非常に興味深い。様々なアイデアを寄せ集めて学術的にも興味深いテーマにまとめ上げる作業は、非常に濃密で意義深い時間である。Table Ronde の企画を担当した際には、もともと研究上の関心を寄せていた関東在住の初対面の先生に熱意を持って参加交渉をした結果、交通費等が出ないにも関わらず参加を快諾してもらえたというエピソードもあった。このように RPK をめぐる「出会い」から学んだことは枚挙に暇がない。また、就職活動の際

にこうした経験についてアピールできたことは現職を得るにあたって大きな利点であったと感じている。専任のポストが減少し続ける昨今にあつて、若手教員がより良い環境で仕事をしていくための手助けを続けていくことは、フランス語教育に関わる組織の非常に重要な責務のひとつではないかと考える。

このように RPK は私にとって素晴らしい学校であったと同時に、現在も教育実践について話せる仲間がいる魅力的なサードプレイスであり続けている。Table Ronde のテーマは「フランス語教師の専門性」であったが、まずは広くアンテナをはってこのような場を見つけること、そして責任感と好奇心を持って仕事に取り組み自ら仲間をひろげる努力を惜しまないことが、教師の専門性に関わる大きな要素なのではないだろうか。そうした周囲の教員との相互作用の中で、「フランス語を教える意義」、そしてそれに見合った教育実践について自分なりの考えを少しずつ育んでいくことが、フランス語教師としての専門性を高めていくということなのではないかと考えている。

Pédagogieを考える会の活動から見るフランス語教師の専門性

NOZAWA Atsushi

Université Keio SFC, nozawa@sfc.keio.ac.jp

Péka (ペカ) の通称で知られているPédagogieを考える会 (以下、Pékaと略す。なお、フランス語表記はAssociation des didacticiens japonais。)の第一回例会は、1990年2月17日に開催された。東京で開催されるフランス語教育に興味を持つ者が集うこの研究会は、今年で誕生25周年を迎えたこととなる。この区切りの年に、「教員養成／相互研修の現場から考えるフランス語教師の専門性」と題されたターブル・ロンドでPékaの活動報告をする機会を筆者は得た。教員養成研修やフランス語教育の研究会の活動報告を通して、フランス語教師の専門性を再検討すること、さらには4つの研修・研究会が各々の立場からフランス語教育に対する立場を明確にし、意見を交換し合うことは有意義であった。本稿ではPékaの活動内容を報告するとともに、会の発足の経緯、活動内容や活動意義を説明し、活動から見えてくるフランス語教師の専門性について明らかにすることを目的とする。

まず、筆者はPékaの例会の一参加者であつて、組織の代表者ではないことを確認しておく。この事実はPékaを語る上で重要である。筆者がPékaに初めて参加したのは2012年12月である。比較的最近参加し始めたので、発足からの活動にとりわけ精通していた訳でもない。しかし、筆者が報告者となったことこそがPékaの自主運営の考え方を平明に語っている。Pékaの主な活動は、年に6回開催される小規模の研究会と論集*Études Didactiques du FLE au Japon* (以下、EDFJと略す。)の年1回の刊行である。これらの活動の運営は組織によるものではなく、参加型の運営体制を取っている。筆者が今回報告者を務めたように、Pékaでは有志が必要な役割を自主的に担当しているのであつて、代表者のような組織だった役職は存在しない。

1990年2月にPékaが発足した背景には、1989年に開催された第一回フランス語セミナーが関係している。研修後も定期的に集まってフランス語教育について議論する機会を設ける目的で、この研修の参加者が中心となり、翌年2月に第一回例会が開かれた。教師を志す者、教師、フランス語教育関係者の人的交流ネットワークの構築が、発足当初からPékaが第一に意図していることである。これは発足から25年経った今日も全く変わっていない。例会への参加要件はなく、資格や身分が問われることはない。実際、教員を目指す大学院生から大学教授までが例会に参加し、

議論を交わしている。例会は多くの人々が例会へ参加できるように土曜日午後開催されている。参加は自由であり、会費や入会手続きはなく、過去にはフランス大使館文化部から財政的援助を受けることはあったものの、現在の運営は基本的にカンパで賄われている。参加の門戸を広く開いているのは、フランス語教育に関心を持つ者が一人でも多く参加して、意見交換を行えるようにするためである。毎回10名から20名程度が参加し、参加者の顔ぶれは毎回異なる。また通常、例会後に有志によって食事会が設けられる。懇親会もまた貴重な交流の機会である。

Pékaは例会活動を外部へ発信することにも注力している。まず例会活動報告や次回例会の告知を行うニュースレターを1992年から発行している。2015年3月5日時点で165名の購読者登録がある。そして例会以外で参加者が情報交換できるようにメーリングリストを保有しており3月10日時点で36名が登録している。なお、ニュースレターやメーリングリストは後述するPékaのホームページから登録することができる。またPékaはその活動を文書化し、保存・発信していくことも重視している。例会と並び、1992年から発行されているEDFJ刊行はPékaの活動の根幹である。例会が実践報告や研修報告、教育現場で直面する問題についての直接的意見交換や批判の場であるのに対して、論集は例会での議論や意見交換の蓄積を図ると同時に、その活動を広範に周知させ、フランス語教育に関する研究を少しでも前進させる目的で発行されている。EDFJはフランス語教育及びそれと密接な関係を有する分野の論文、実践報告、例会発表要旨、研修報告、書評等を掲載している。これまでは冊子形態のみで発行されてきたが、今後は冊子とともに電子版の公開を準備していく。また過去に刊行された論集についても随時電子化し、公開していく予定である。電子化された論集の公開を含めて、今後のPékaを語る上で大切となるのはインターネットを活用した情報発信であろう。Pékaの活動とその成果を公開し、容易に情報にアクセスすることを可能にするために、ホームページ運営を徹底していくことになりそうだ。2015年3月にPékaのホームページは大きく刷新された(<http://peka-web.sakura.ne.jp>)。ホームページとともに、今後はさらに充実した情報提供と広報活動のために、ソーシャル・ネットワーキング・サービスを活用することも検討されるであろう。

Pékaはフランス語教育について同じ志を持つ仲間、同じ目標を持っている同輩を見出す場である。そこで、様々な現場で活躍する教師やフランス語教育関係者が、各々の経験を元にして主体的に外国語としてのフランス語教育について自由かつ真摯に議論し、お互いの教育に対する意識を高め合うように努めている。参加者同士が刺激し合うことで、一人一人が自律的に教育活動の改善を図り続ける自己／相互啓発の空間を参加者自身が作り出している。そこで何より尊重されていることは、参加者の平等と他者の尊重である。例会の発言において経験、年齢、役職が問われることないように、参加者の序列関係は排除される。端的に「先生」という敬称は忌避され、例会の発言においては参加者全員が平等であるという理念の下、和気あいあいとした雰囲気の中で話し合いが展開される。それ故、Pékaの例会では単に教えを乞う姿勢や威圧的な態度は評価されない。現場の経験やそこで得た知見を参加者は報告・発表し、皆で建設的な議論を行うことが例会の原則である。先述の通り、参加者の平等は運営体制にも及んでいる。会長や幹事長、会計などの役職はなく、参加者の自主運営となっている。会計、論集の編集、例会の企画・運営、広報など、有志の参加者が担当可能な範囲で業務を分担し、運営に携わっている。年間テーマ

や各例会のテーマも例会の議論で決定される。このように今日に至るまで、参加者主体のネットワーク作りは揺らぐことないPékaの活動意義となっている。

1990年以来、年6回開催されているPékaの例会の形式は、その時々参加者の決定により漸次変化している。発足当時は参加者の議論を経て決定された年間テーマに応じて、担当者がアトリエや実践報告を行っていた。近年は特定の年間テーマや発表担当者を設けることはせず、例会ごとにテーマを定めて、参加者がそれぞれ持ち寄った問題について自由討論していた。昨年度からは自由討論に加えて、年間テーマに則して議論を行う時間も設けることになっている。2014年度の年間テーマは「初学者の発話を促すためにはどうすればいいのか」であった。2015年度の年間テーマは6月の例会前に公式に発表されることになっている。過去の年間テーマを考察していて興味深いのは、各年に設定されたテーマの幾つかが循環していることである。文法や発音の指導方法、使用教材の選択基準や利用法、コミュニケーション能力養成の活動例、フランス語教師の「あり方」は、Pékaの例会の歴史の中で幾度となく議論の俎上に載せられている。このことは教師が争点とする話題が今も昔も大きく変わっていないことを意味する。しかし毎回同じ議論が繰り返されている訳ではない。唯一の正答がある問いではないし、教育環境や政治的方策、そして学習者の要求は状況に応じて変化するからだ。教育活動は絶対的なものではなくて変化するものであることを教師は認識しておかなければならない。教師はこうした変化に敏感でいて、変化に対応すべく日々研究している。教授法の学術的発展によって新しい教授法が生み出され、新しい教材が開発される。技術の進歩によって教育現場で使用できる道具や器具は刷新される。さらには、経験の蓄積と不断の研究によって教師の教育に対する考え方も変化していく。同じテーマが登場することは、こうした変化に教師自身が反応していることを裏付けるものであり、日本のフランス語教育環境や教育に携わる者が健全に変化していると考えられる。

言語習得とは人間同士の関わり合いの中で行われる。教えや学びは至極人間的な営みであり、場面に応じて対応は異なってくる。特定の手法や信念に極度に固執し、変化を怠る教師は新しい環境に対応できない。自己啓発や交流の場を必要とする教師は、現場で絶えず遭遇する教育活動の疑問や課題に挑んでいる教師が多いのではないだろうか。Pékaの活動から見えてきた、筆者が考えるフランス語教師の専門性とは、「教師は変容する」ことを自覚し、教育活動に取り組むことにある。そしてこうした専門性は決してフランス語教師に限定されるものではない。全般的に教師の専門性とは、時局の要請、教育機関の要請、学習者の要請、そして教師自身の矜持に応えるべく、刻々と変化する環境に働きかけ、絶えず創意工夫を凝らし、日々研鑽を積むことをいとわない職人気質を持つことである。

最後に、今回参加した4つの研修・研究会が別個の存在ではないことを強調したい。これらの研修・研究会全てに参加した経験を持つフランス語教師は少なくないはずだ。筆者もその一人だ。大切なことは、フランス語教育を熱心に考える会合が関東にも関西にも存在すること、そして多くのフランス語関係者が各会合に参加していることである。もちろんそれぞれが固有の性格を持っており、その活動や趣旨には相違が認められる。しかし、フランス語教育の発展に尽力する姿勢が同じであることを今回確認することができた。それぞれの研修や研究会が切磋琢磨し、時には協力しながら、教員養成や自己／相互研修の場において多くのフランス語教師の成長を促し、今後の日本のフランス語教育の発展に寄与することができれば、フランス語教育の未来も明るくなるのではないだろうか。